

公園のない街に人は集まらない



【インターネット・マルチキャスティング・サービス】

社長：カール・マラムッド氏

インターネット上のオーディオに注目

たしか、このプロジェクトを考えたのは、92年の半ばっていうことになるかな。この仕事を始める前には、ネットワークについての本を7つくらい書いてたね。だけど、ちゃんとした本を書いている、スティーブン・キングくらいにならないと、まともな生活はできない（笑）。

そのころ僕は「Exploring Internet」という本を書き終えたところで、なにか別のことをやろうと考えてた。でも、雑誌を出すにはお金がかかる。で、ネットワークでニューズレターを出そうとも思ったんだけど、マルチメディアの領域で起こっていることを考えると、インターネットではオーディオというテーマについてはあんまり取り上げられてないということに気づいたんだ。

数メガバイトのファイルを送るってことは大変なことには違いないけど、扱えないわけじゃない。そこで、週に1回30分の番組をやってみようということになった。それが「Geek of the Week」で、ニューヨークタイムスの第一面に紹介されたんだけど、結構評判になってね。それにはみんな驚いたね、自分自身を含めて（笑）。

ラッキーなデビューを飾れたということもあって、インターネット上でラジオ局をやろうということになった。そこで93年の1月にこのプロジェクトを始めて、4月から放送を開始したんだ。

P R O F I L E

ワシントンのナショナルプレスビルに放送スタジオを持つインターネット・マルチキャスティング・サービス（IMS）は、インターネット上で文字情報だけでなく画像や音声も送り出している放送局。名前もRTFM（Radio Technology for Mankind）とそれらしい。普通の放送局と違うところは、視聴者がコンピュータの端末で放送を受け取る場所。番組は、アート、音楽、著名人とのインタビュー、政治、科学、テクノロジー関連のニュースなど、多岐にわたる。IMSは非営利で活動しており、出版社やコンピュータ会社などからの援助で運営されている。

URL <http://north.pole.org/>



公共放送をモデルに非営利で活動

実は、僕はコンピュータの分野に入る前はエコノミストで、公共政策に非常に興味をもった。そんなこともあって、アメリカではサイエンスやテクノロジーについて、あまりよくレポートされていないし、もっとちゃんと掘り下げた情報が必要だと思ってたんだ。だから、PBSだとか、BBCのような公共性の高い放送組織をモデルに考えたわけ。

実際、僕らのやっていることは、PBSとかCNNとか、ちゃんとしたネットワークと同じことなんだよ。僕らのところでは「The North Pole」という番組もあるけど、政府の情報、下院議員のインタビュー、議会の中継だとか、そういったプログラムのミックスをやってるわけ。

まあ、うちは非営利団体をモデルにしたんで、全体的には真面目な内容なんだ。でも、最初はちょっと大変だったね。「Geek of the Weekに出ませんか」なんて出演依頼をすると、「なに馬鹿を言ってるんだ」なんて言われたこともあったし。(笑) もっと

面倒だったのは下院に話を聞きに行くときで、「こんにちは、僕はプレスなんですけど…」という具合にプレスカードを見せなきゃいけない。プレスカードがないと下院に入れないし、プレスクラブにも入れないんで、それをまず手に入れたんだよ。そのためには、やっていることがジョークじゃなくて、本物のメディアとしてやっているんだということをわかってもらわないといけなかったから大変だった。

ビジョンに賛同してくれるスポンサーがあった

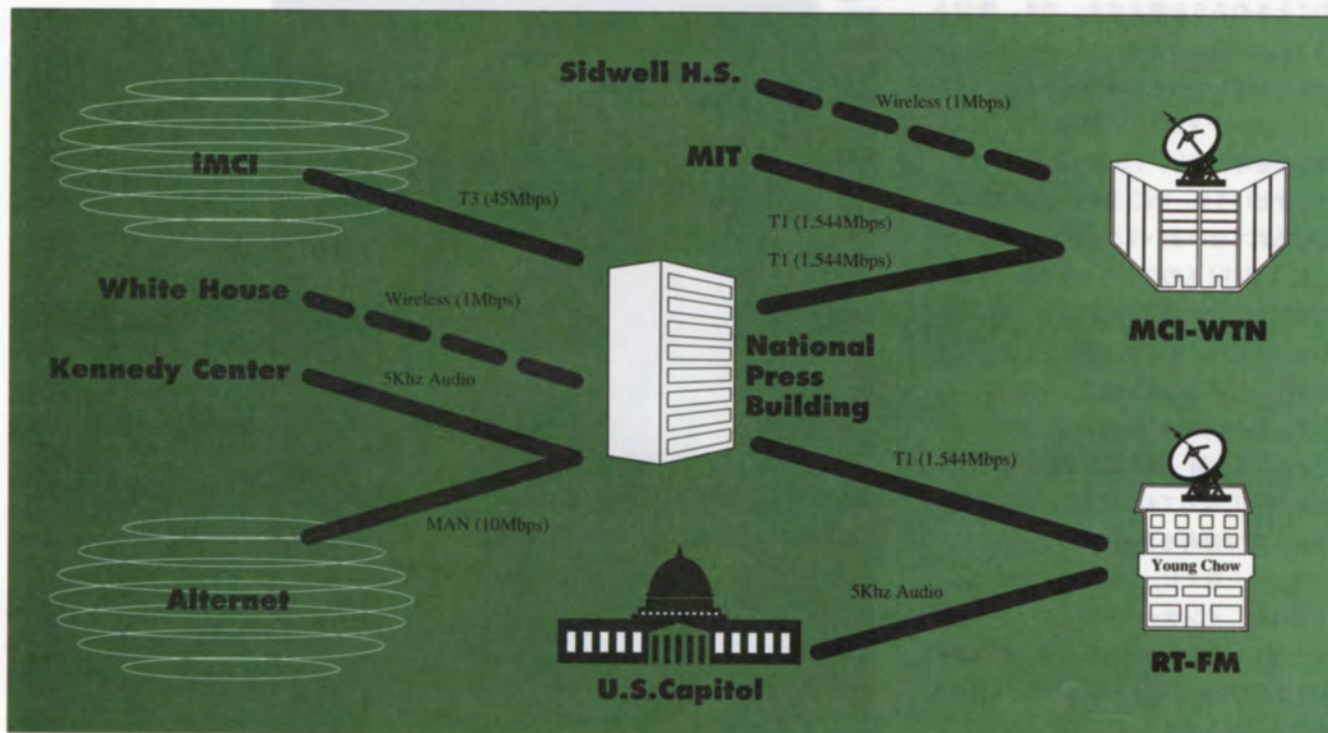
インターネットでラジオ局を始めるときの一番の問題は、政府のほうじゃなくてお金の問題だったね。もともとインターネットで誰が何をやるかについて、政府は規制するような権利を持ってない。だから、こういうビジネスを始めてもいいかという御伺いをたてる必要はないんだ。

お金の面でうちを支えてくれたのは、サンマイクロシステムズやオライリーやMCIといったスポンサー。そういったところが基

金を寄せてくれたんだけど、それはなぜかという、僕らの放送が非常に多くの人に届くからなんだ。そして、もう1つ重要な側面は、うまくいけば、僕らがインターネット上でニューヨークタイムズみたいな大きな存在になれるかもしれないという可能性だね。

企業にアプローチするときには、社長とか、技術担当の取締役とかに話を持っていたね。広告ページを買ってやるようなマーケティングの担当に持っていっても、僕らのやってくるものの可能性なんか、わからないしね。たとえば、MCIではビント・サーフが最初のスポンサー。オライリーだとティム・オライリー。彼らにはビジョンがあるし、僕らのやろうとしていることを理解してるし、彼らにとっても長期的にみればお金になるということがわかってるんだ。

まあ、インターネットと関わりを持とうとしている人はたくさんいるわけで、たとえばサンはコンピュータを売りがっているわけだし、MCIは回線を売ろうと思ってる。でも、僕らの役割はグローバルビレッジで公園の役割を果たすことなわけ。僕らは公



1:3 見えて代イッホーをベの部本コにスレでマ

共の情報を提供するわけだし、それはほかのところでは手に入らないんだよね。

メディアとしての成長には

パブリックな情報が不可欠

歴史的にいうと、人は学校だとか図書館だとか、そういった公共的な施設がないような街には集まってこない。つまり、僕らのような公共的な情報を提供するサービスがないと、結果的にインターネットには人がやってこないってことなんだよ。もしインターネット、というか新しいメディアがごく普通の人にまで普及するとすれば、そのためにはパブリックなものが必要なんだ。パブリックなリソースを提供する組織があるからこそ、結果的にインターネットはみんなが使うものになる。ケーブルTVの世界でいえば、CNNがその役割を果たしたことによってケーブルTVが広がっていったように、僕らのようなチャンネルがあればこそインターネットも広がっていくと思ってるんだ。

ルールを守り権利を主張する

権利関係をクリアしたものをネットに載せるっていうのがうちの姿勢なんだ。そういったことが、インターネットをきちんとしたメディアとして成り立たせるには是非とも必要なことだと思ってる。これには結構

大変なネゴシエーションが必要なんだけど、ちゃんとしたやりかたをすれば大丈夫だよ。基本的には、上院にアクセスするには、上院のルールを読んで、自分たちがちゃんとしたメディアだということを証明する。企業にアクセスするときは、自分たちがちゃんとした広告メディアであるということをアピールして……という具合にやっていけば、結構うまくいくものなんだ。

音楽については、ちょっと大変だけどね。BMI (Broadcast Music Inc.) とか ASCAP (American Society of Composers, Authors and Publishers) という団体があって、そこが著作権関係の権利処理をやってるんだけど、僕らはもう1年もそこと交渉してるよ。僕らはお金を払おうとしてるんだけど、彼らは受け取ろうとしないんだよ (笑)。どのくらいが正当なレートなのかを決めようとしているんだけど、もうすぐ片付くと思うよ。実際、彼らには許諾する権利はあっても拒否する権利はないんだからね。

ナショナル・プレスセンター・ビル



編集用機材とワークステーション

インターネット・マルチキャスト・サービスは中華料理屋の2階と3階



新時代の公共セクターを拓く米国の非営利団体

① マラムッド氏によれば、米国の非営利団体は以下の点で営利団体と異なるという。

公共の福祉を目的として他からの基金で設立されるものであって、その資産は売却することができない (ただし、他の非営利団体に寄付することは可能)。

こうした点から見れば、彼のいう「スポンサー」とは、非営利団体が行う公共のための福祉活動に賛同し、活動資金を提供

する者ということになる。もちろん、株式配当もないしキャピタルゲインもないわけだから、投資行為ではありえない。しかし非営利団体の選択さえ考えれば、その活動を通して結果的に企業イメージの向上や宣伝活動を行うことができるから、通常の宣伝活動と比べても遜色のない効果が得られることも多い。この点、マラムッド氏とそのスポンサーはまさに正しいメディア (商行為

が行われる以前のインターネット) を選ぶという先見の明があったといえるだろう。

最後に、彼の話には出てこなかったが、日本では多くの場合、公益法人を運営する者はその生活を営めるほどの収入を得られない、つまり収入をアテにしてはならない名譽職的地位を強いられるのに対して、米国の非営利団体では十分な収入を得ることも可能なようだ。